## 近接勾配法

(3.5)式

$$\frac{1}{2}\|y - X\beta\|_2^2 + \lambda\|\beta\|_2 \tag{3.5}$$

の最小化問題に対するアプローチとして, (3.10) 式, (3.11) 式

$$\gamma := \beta + \nu X^T (y - X\beta) \tag{3.10}$$

$$\beta = \left(1 - \frac{\nu \lambda}{\|\gamma\|_2}\right)_+ \gamma \tag{3.11}$$

を繰り返すことを前節で考えたが,一般には上式が (3.5) 式の最適解に収束することは保証されない。以下では  $\nu>0$  の値を上手く設定することによって (3.10),(3.11) 式のループによって正しい解に収束することを示す.

まず $\lambda = 0$ の場合であれば(3.11)式において

$$\beta = \gamma$$

となるため、(3.10) 式と (3.11) 式のループは

$$\beta_{t+1} \leftarrow \beta_t + \nu X^T (y - X\beta_t) \gamma$$

とかけることに注意したい. ここで,  $g(\beta)=\|y-X\beta\|_2^2$  と定めれば  $\nabla g(\beta)=-X^T(y-X\beta)$  とかけることより、上式は

$$\beta_{t+1} \leftarrow \beta_t - \nu \nabla g(\beta_t)$$

と書くことにする.この方法は g の減少の大きい方向に  $\beta$  を更新していくという意味で, 勾配法と呼ばれている.

以下では,(3.5) 式の第 2 項を  $h(\beta) := \lambda ||\beta||_2$  とおいて, $\lambda > 0$  での勾配法を

$$\beta_{t+1} \leftarrow \beta_t - \nu \{ \nabla q(\beta_t) + \partial h(\beta) \} \tag{1}$$

とした場合の収束性について考えたい.ここで,関数 h に対して写像  $\mathrm{prox}_h:\mathbb{R}^p \to \mathcal{P}(\mathbb{R}^p)$  を

$$\mathrm{prox}_h(z) := \mathrm{argmin}_{\theta \in \mathbb{R}^p} \left\{ \frac{1}{2} \|z - \theta\|_2^2 + h(\theta) \right\}$$

とすることで、(1)式は

$$\beta_{t+1} \leftarrow \operatorname{prox}_{\nu h}(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t))$$

とかけること、すなわち (1) 式で更新される  $\beta$  は

$$\varphi(\theta) = \frac{1}{2} \|\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) - \theta\|_2^2 + \nu h(\beta)$$

を最小にする $\theta$ と一致することを以下で確認する.

最初に  $\varphi(\theta)$  を最小にする  $\theta'$  について考える;まず  $\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) = 0$  であるとき,  $\varphi(\theta) = \frac{1}{2} \|\theta\|_2^2 + \nu h(\theta) \ge 0$  であり,等号成立は  $\theta = 0$  のときに限ることより,求める  $\theta'$  は  $\theta' = 0$  であることがわかる.

次に  $\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) \neq 0$  であるとき, $\theta \neq 0$  における  $\frac{\partial \varphi(\theta)}{\partial \theta}$  を求めると

$$\frac{\partial \varphi(\theta)}{\partial \theta} = -(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) - \theta) + \frac{\nu \lambda \theta}{\|\theta\|_2}$$

となるので、 $\varphi(\theta)$  を最小にする  $\theta'$  は

$$\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) - \theta' = \frac{\nu \lambda \theta'}{\|\theta'\|_2} \tag{2}$$

を満たしている.ここで  $\tilde{\beta}_t := \beta_t - \nu \nabla g(\beta_t)$  とおくと,上式はある実数  $\alpha \neq 0$  が存在して  $\theta'$  が

$$\theta' = \alpha \tilde{\beta}_t$$

とかけることを意味している. したがってこれを (2) 式に代入することで

$$\tilde{\beta}_t - \alpha \tilde{\beta}_t = \frac{\nu \lambda \alpha}{|\alpha| \|\tilde{\beta}_t\|_2} \tilde{\beta}_t$$

$$\alpha \tilde{\beta}_t = \left(1 - \frac{\nu \lambda \alpha}{|\alpha| \|\tilde{\beta}_t\|_2}\right) \tilde{\beta}_t$$

が成立することがわかり, $ilde{eta}_t 
eq 0$  であることから上式の係数を比較して

$$\alpha = 1 - \frac{\nu \lambda \alpha}{\|\alpha\| \|\tilde{\beta}_t\|_2}$$
$$= 1 - \frac{\nu \lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|} \cdot \operatorname{sign}(\alpha)$$

となることがわかる. ここで, 仮に  $\alpha$  < 0 であるとすると

$$0 > \alpha = 1 + \frac{\nu \lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|} > 0$$

となってしまい、矛盾が生じる. したがって  $\alpha > 0$  であることがわかるので

$$\alpha = 1 - \frac{\nu \lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|}$$

となることがわかる. これを  $\theta'=lpha ilde{eta}_t$  に代入することで求める  $\theta'$  は

$$\theta' = \left(1 - \frac{\nu\lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|}\right)\tilde{\beta}_t$$

$$= \tilde{\beta}_t - \frac{\nu\lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|}\tilde{\beta}_t$$

$$= \beta_t - \nu\nabla g(\beta_t) - \frac{\nu\lambda\tilde{\beta}_t}{\|\tilde{\beta}_t\|}$$

$$= \beta_t - \nu\nabla g(\beta_t) - \nu\frac{\partial h}{\partial \theta}(\tilde{\beta}_t)$$

$$\therefore \theta' = \beta_t - \nu\nabla g(\beta_t) - \nu\frac{\partial h}{\partial \theta}(\tilde{\beta}_t)$$

となることがわかる.

以上より  $\varphi(\theta)$  を最小にする  $\theta'$  は

$$\theta' = \begin{cases} \beta_t - \nu \left\{ \nabla(\beta_t) - \frac{\partial h}{\partial \theta}(\tilde{\beta}_t) \right\} & (\beta_t - \nu \nabla(\beta_t) \neq 0 \text{ obe}) \\ 0 & (\beta_t - \nu \nabla(\beta_t) = 0 \text{ obe}) \end{cases}$$

と書くことができるが、関数 h の劣微分が 0 を含むことから改めて

$$\theta' \in \beta_t - \nu \left\{ \nabla(\beta_t) - \partial h(\tilde{\beta}_t) \right\}$$

とかくことができ、これは(1)式と一致することがわかる.

上記より,新たに提案された勾配法は

$$\beta_{t+1} \leftarrow \operatorname{prox}_{\nu h}(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t))$$

とかけることが確認できた. ここで  $\operatorname{prox}_{\nu h}(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t))$  が実際には

$$\operatorname{prox}_{\nu h}(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t)) = \left(1 - \frac{\nu \lambda}{\|\tilde{\beta}_t\|}\right)_+ \tilde{\beta}_t$$

とかけていたことから更新式は

$$\gamma \leftarrow \beta - \nu \nabla g(\beta_t) = \beta + \nu X^T (y - X\beta)$$
$$\beta \leftarrow \left(1 - \frac{\nu \lambda}{\|\gamma\|_2}\right)_+ \gamma$$

とかけることがわかる. これは (3.10),(3.11) の更新式に他ならない.

最後に  $\nu$  を上手くとることができれば、上記の更新式によって  $f(\beta)$  を最小にする  $\beta_*$  を求められることを示す.

まず  $X^TX$  の最大固有値を L とすれば、任意の  $x,y,z \in \mathbb{R}^p$  に対して

$$(x-y)^T \nabla^2 g(z)(x-y) \le L ||x-y||_2^2$$

が成立することを示す; $X^TX$  が対称行列であることから,ある直交行列 P が存在して

$$P^{T}(X^{T}X)P = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots & \\ & & & \lambda_p \end{pmatrix}$$

が成立する. さらに L の定め方より,任意の  $x=(x_1,\cdots,x_p)^T\in\mathbb{R}^p$  に対して I を p 次単位行列として

$$x^{T}P^{T}LIPx = L \cdot x^{T}P^{T}Px$$

$$= L \sum_{i=1}^{p} x_{i}^{2} \ge \sum_{i=1}^{p} \lambda_{i}x_{i}^{2}$$

$$= x^{T} \begin{pmatrix} \lambda_{1} & & \\ & \lambda_{2} & \\ & & \ddots & \\ & & \lambda_{p} \end{pmatrix} x$$

$$= x^{T}P^{T}(X^{T}X)Px$$

が任意の  $x \in \mathbb{R}^p$  に対して成立していることより、 $x \to P^T(x-y)$  とおけば

$$(x - y)^T \nabla^2 g(z)(x - y) = \{ P^T(x - y) \}^T P^T(X^T X) P \{ P^T(x - y) \}$$

$$\leq \{ P^T(x - y) \}^T P^T L I P \{ P^T(x - y) \}^T$$

$$= L \| x - y \|_2^2$$

$$\therefore (x - y)^T \nabla^2 g(z)(x - y) \leq L \| x - y \|_2^2$$

となり、求めたい不等式が導ける.

また, (3.13) 式について

$$\operatorname{prox}_{\nu h}(\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t)) = \operatorname{argmin}_{\theta \in \mathbb{R}^p} \left\{ \frac{1}{2} \|\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) - \theta\|_2^2 + \nu h(\theta) \right\}$$

$$= \operatorname{argmin}_{\theta \in \mathbb{R}^p} \left\{ \frac{1}{2\nu} \|\beta_t - \nu \nabla g(\beta_t) - \theta\|_2^2 + h(\theta) + g(\beta_t) \right\}$$

$$= \operatorname{argmin}_{\theta \in \mathbb{R}^p} \left\{ \frac{1}{2\nu} \|\beta_t - \theta\|_2^2 + (\beta_t - \theta)^T \nabla g(\beta_t) + h(\theta) + g(\beta_t) \right\}$$

が成立することより、 $\nu = \frac{1}{L}$  とした (3.13) 式を

$$Q(x,y) := g(y) + (x - y)^T \nabla g(y) + \frac{L}{2} ||x - y||_2^2 + h(x)$$
$$p(y) := \operatorname{argmin}_{x \in \mathbb{R}^p} Q(x,y)$$

を用いて

$$\beta_{t+1} \leftarrow p(\beta_t) \tag{3}$$

と書きなおしておく.\*1

以上で定めた定数 L, 写像 Q,p に対し、次の命題 7 が成立する

命題 7

(3) 式によって生成された列  $\{\beta_t\}$  は,f の最小化問題に対する最適解を  $\beta_*$  として次式を満たす

$$f(\beta_k) - f(\beta_*) \le \frac{L\|\beta_0 - \beta_*\|_2^2}{2k}$$

証明には以下の補題1を用いる.

補題 1 ·

任意の  $x, y \in \mathbb{R}^p$  に対して

$$\frac{2}{L}f(x) - f(p(y)) \ge ||p(y) - y||_2^2 + 2(y - x)^T (p(y) - y)$$

が成立する.

Proof. 自然数 k を任意にとって固定する. 補題 1 で  $x=\beta_*,y=\beta_t$  とおき、さらに  $p(\beta)=\beta_{t+1}$  であることを用いれば

$$\frac{2}{L} \left\{ f(\beta_*) - f(\beta_{t+1}) \right\} \ge \|\beta_{t+1} - \beta_t\|_2^2 + 2(\beta_t - \beta_*)^T (\beta_{t+1} - \beta_t) 
= \langle \beta_{t+1} - \beta_t, \beta_{t+1} - \beta_t + 2(\beta_t - \beta_*) \rangle 
= \langle (\beta_{t+1} - \beta_*) - (\beta_t - \beta_*), (\beta_{t+1} - \beta_*) + (\beta_t - \beta_*) \rangle 
= \|\beta_{t+1} - \beta_*\|_2^2 - \|\beta_t - \beta_*\|_2^2$$

が任意の自然数  $t \leq k$  に対して成立することがわかる.したがって上の不等式を  $t=0,\cdots,k-1$  について足し合わせれば

$$\frac{2}{L} \left\{ k f(\beta_*) - \sum_{t=0}^{k-1} f(\beta_{t+1}) \right\} \ge \|\beta_* - \beta_k\|_2^2 - \|\beta_* - \beta_0\|_2^2$$
(4)

<sup>\*1</sup> この方法は ISTA(Iterative Shrinkage-Thresholding Algorithm) と呼ばれる

が成立することがわかる. さらに  $x=y=\beta_t$  として再び補題 1 を適用すると

$$\frac{2}{L} \{ f(\beta_t) - f(\beta_{t+1}) \} \ge \|\beta_{t+1} - \beta_t\|_2^2$$

となることより、上式の両辺を t 倍し、 さらに  $t=0,\cdots,k-1$  について加えることで

$$\frac{2}{L} \sum_{t=0}^{k-1} t \left\{ f(\beta_t) - f(\beta_{t+1}) \right\} = \frac{2}{L} \sum_{t=0}^{k-1} \left\{ t f(\beta_t) - (t+1) f(\beta_{t+1}) + f(\beta_{t+1}) \right\}$$
 (5)

$$= \frac{2}{L} \left\{ -kf(\beta_k) + \sum_{t=0}^{k-1} f(\beta_{t+1}) \right\} \ge \sum_{t=0}^{k-1} t \|\beta_t - \beta_{t+1}\|_2^2 \quad (6)$$

が成立することがわかる. 以上で得られた不等式 (4),(6) の両辺を加えることで

$$\frac{2k}{L} \{ f(\beta_*) - f(\beta_k) \} \ge \|\beta_* - \beta_k\|_2^2 - \|\beta_* - \beta_0\|_2^2 + \sum_{t=0}^{k-1} t \|\beta_t - \beta_{t+1}\|_2^2 \\
\ge - \|\beta_* - \beta_0\|_2^2 \\
\therefore f(\beta_k) - f(\beta_*) \le \frac{L \|\beta_0 - \beta_*\|_2^2}{2k}$$

が得られる. これが求めたかった不等式である.

ISTA の修正アルゴリズムとして、次を考える;実数列  $\{\alpha_t\}$  を

$$\alpha_1 = 1, \quad \alpha_{t+1} := \frac{1 + \sqrt{1 + 4\alpha_t^2}}{2}$$

によって定め、さらに初期値  $\beta_0$  に対して  $\gamma_1=\beta_0$  として更新式を

$$\beta_t \leftarrow p(\gamma_t)$$

$$\gamma_{t+1} \leftarrow \beta_t + \frac{\alpha_t - 1}{\alpha_{t+1}} (\beta_t - \beta_{t-1})$$

によって定める.この手法は FISTA\*²と呼ばれ,得られる列  $\{\beta_t\}$  は次の命題 8 を満たす

命題 8

FISTA によって生成された数列  $\{\beta_t\}$  は,f の最小化問題に対する最適解を  $\beta_*$  として次式を満たす

$$f(\beta_k) - f(\beta_*) \le \frac{4L\|\beta_0 - \beta_*\|_2^2}{(k+1)^2}$$

証明には以下の補題 2,3,4 を用いる

<sup>\*2</sup> Fast Iterative Shrinkage-Thresholding Algorithm

補題2

FISTA で考える列  $\{\alpha_k\}$  と得られる列  $\{\beta_k\}$ ,及び最適解  $\beta_*$  に対して次式が成立する

$$\frac{2}{L} \left\{ \alpha_k^2 (f(\beta_k) - f(\beta_*)) - \alpha_{k+1}^2 (f(\beta_{k+1}) - f(\beta_*)) \right\} \ge t_{k+1} - t_k$$

ただし  $t_k := \|\alpha_k \beta_k - (\alpha_k - 1)\beta_{k-1} - \beta_*\|_2^2$  とする.

## 補題3

ある実数 c が存在して,2 つの非負値実数列  $\{a_k,b_k\}$  が任意の自然数  $k\geq 1$  について

$$a_k - a_{k+1} \ge b_{k+1} - b_k$$
 かつ  $a_1 + b_1 \le c$ 

を満たすならば、任意の自然数 k に対して  $a_k \leq c$  が成立する.

## - 補題 4 -

FISTA で考える列  $\{\alpha_k\}$  は任意の自然数  $k \ge 1$  に対して

$$\alpha_k \ge \frac{k+1}{2}$$

が成立する.

Proof. 補題 2 より

$$\frac{2}{L}\alpha_k^2(f(\beta_k) - f(\beta_*)) - \frac{2}{L}\alpha_{k+1}^2(f(\beta_{k+1}) - f(\beta_*)) \ge t_{k+1} - t_k$$

が成立する.ここで、 $s_k:=rac{2}{L}lpha_k^2(f(eta_k)-f(eta_*))$  とすることで上式は

$$s_k - s_{k+1} \ge t_{k+1} - t_k \tag{7}$$

と書き直せる. さらに  $\{s_k\}$ ,  $\{t_k\}$  は共に非負値実数列で (7) 式及び

$$s_1 + t_1 \le 2\|\beta_0 - \beta_*\|_2^2$$

を満たすので、 $c = 2||\beta_0 - \beta_*||_2^2$  として補題 3 を適用すれば

$$s_k \le c \Leftrightarrow \frac{2}{L} \alpha_k^2 (f(\beta_k) - f(\beta_*)) \le 2\|\beta_0 - \beta_*\|_2^2$$

が得られる. 上式に補題 4 を適用すれば、任意の自然数 k に対して

$$f(\beta_k) - f(\beta_*) \le L \|\beta_0 - \beta_*\|_2^2 \cdot \frac{1}{\alpha_k^2}$$

$$\le L \|\beta_0 - \beta_*\|_2^2 \cdot \frac{4}{(k+1)^2} = \frac{4L \|\beta_0 - \beta_*\|_2^2}{(k+1)^2}$$

が成立することがわかる. これが求めたかった不等式である.